



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

平家一族と唐物

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河添,房江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107177

平家一族と唐物

河添 房江
(日本語・日本文学研究講座)

要 旨

平家一族は平清盛の父忠盛の時代から日宋貿易に深く関わり、巨万の富を築き上げた。本稿では、平家一族と舶載品である唐物の関わりを、平清盛の官歴や福原での貿易の実態、『平家物語』や国宝『平家納経』から明らかにした。さらに、その栄華が『源氏物語』の光源氏と明石一族を想起させることに言及した。また宋人との対面や、宋銭の輸入など日宋貿易の推進が、都の貴族層の反発を招いたことを明らかにした。しかし、平清盛が宋の禁書である『太平御覧』を買い上げ、安徳天皇に献上したことは、清盛の開明性を示し、後の時代にも貢献した。平家一族にとって日宋貿易で得た唐物の富は、経済的な基盤であったばかりか、貴族層や上皇を抑えて平氏政権を樹立し、文化的覇者となるための必須の糧だったのである。

キーワード：平清盛、唐物、平家物語、源氏物語

一 「揚州の金、荊州の珠」

『平家物語』巻一では、平家一族の盛栄を次のように語っている。

日本秋津島は、纔かに六十六箇国、平家知行の国、卅余箇国、既に半国にこえたり。(中略) 揚州の金、荊州の珠、呉郡の綾・蜀江の錦、七珍万宝、一つとして闕けたる事なし。歌堂舞閣の基、魚竜爵馬の翫もの、恐らくは帝闕も仙洞も是には過ぎじとぞみえし。(①三三三三四)^①

この条の前半では、平氏の知行国が全国の半分にも達し、強大な勢力を誇ったことを、後半は揚州の金をはじめ、日宋貿易が平氏にもたらした巨万の富を

明らかにしている。ここでの「帝闕」は朝廷、「仙洞」は上皇を指し、平家が「七珍万宝」と呼ばれた舶載品の蓄積において、朝廷や上皇をも凌駕したのであると推測しているのである。

ところで「揚州の金、荊州の珠、呉郡の綾・蜀江の錦」と並べられた舶載品、いわゆる唐物は、日宋貿易で取引された代表的な名産品をうかがい知る意味でも、興味ぶかい。もっとも「揚州の金、荊州の珠、呉郡の綾・蜀江の錦」については、それぞれ古く典拠のある表現が選ばれていることも忘れてはならないだろう。

揚州は江南地方に位置し、隋の煬帝が愛でて離宮を建設するとともに、巡幸のため運河を建設して海上交通の要となり、唐代には国際的な港となり交易で栄えた。「揚州の金」については、古くは五経の一つである『書経』^②「禹貢」^③の条に金の産地とある。荊州は湖北地方にあり、『三国志』の舞台としても知

られるが、同じく『書経』「禹貢」に珠の産地と記されている。呉郡は江蘇地方にあり、『唐書』⁴の韋堅伝に綾の産地とする。蜀江は四川省で、錦の名産地である。「蜀江の錦」は三国六朝時代から唐・宋・元・明に至るまで生産され、奈良時代から日本にもたらされた。法隆寺に伝来する蜀江錦は、経糸で文様をあらわした経錦で、鮮やかな赤地に格子連珠文様などを織り出した唐代の錦である。『太平記』三九にも、「橋板に大唐氍毹、呉郡の綾、蜀江の錦色々に布展べたれば」とあり、そこでもやはり呉郡の綾と蜀江の錦が舶載の綾錦として並び称されている。⁵

「楊州の金、荊州の珠、呉郡の綾・蜀江の錦」は典拠があり、文飾をこらした表現ということになるが、美辞麗句というにとどまらず、平家一族がいかに日宋貿易によって最高の唐物を多く蓄財したかを意識して、語りなした表現とみてよいのではないか。

二 平清盛の台頭―その官歴と交易

ところで、なぜ平家一族は深く日宋貿易に関わり、「七珍万宝」が一つとして欠けることがないという巨万の富を築き上げたのか、その謎を解く鍵は、平清盛とその父の忠盛の官歴にあるといえる。

そもそも平家一族は、父忠盛の時代、院の莊園であった肥前国神埼莊の預所（管理者）として日宋貿易をおこない、舶載品を鳥羽院に進呈して近臣として認められるようになった。『長秋記』の長承二年（一一三三）八月の記事によると、宋商人の周新が来航し、大宰府の官人と交易したが、平忠盛が横槍を入れて、宋船が来航したのは神埼莊であるので、大宰府の官人が関与してはならないという下文を作り、それを鳥羽院の院宣と称したという。神埼莊は有明海に面した大きな莊園であるが、博多にもその所領があったので、そこに入港したという説もある。それはともかくも、忠盛の主張は受け入れられたのである。忠盛が日宋貿易に介入したのは、鳥羽院が唐物をはじめ宝物の熱心なコレクターだったので、唐物を献上して、その歡心を買うためであったともされる。鳥羽院の威光をバックに、忠盛は大宰府と対抗しつつ、積極的に日宋貿易に関与していったのである。

一方、息子の清盛といえは、

肥後守―安芸守―播磨守―大宰大式

といった海運や交易に関わる重要なポストを歴任することで、日宋貿易に深く関わっていく。清盛は肥後守に続いて、瀬戸内海の要所である安芸国の国守となるが、それは瀬戸内海の制海権を手に入れたことを意味し、後に厳島神社への肩入れとなる。⁶

父忠盛の死後、清盛は氏の長者となり、保元の乱で後白河方に味方して勝利し、播磨守となった。さらに大宰大式になったことで、日宋貿易の中枢に深く関わった。当時、大宰大式は現地に赴任しないのが慣例になっていたが、貿易の利権だけは享受していたであろう。白河の千体新阿弥陀堂の造営も、清盛が大宰大式の財力により請け負ったものであった。やがて清盛は大宰大式を経て、参議から内大臣、そして太政大臣と、権力の中枢に上り詰めていく。

三 清盛と『源氏物語』の明石一族の栄華

ところで、清盛をはじめとする平家一族の栄華は、高橋昌明氏により『源氏物語』⁷のとある一族に擬えられているが、誰だかおわかりだろうか。答えは明石一族である。その要点をここで示せば、後白河法皇は「彦火々出見尊繪卷」を作らせたが、その意図が表面では平清盛とその娘徳子の入内の栄華をことほぐかに見えて、じつは明石一族を連想させることで見下し、その栄華に釘を刺したというのである。出家した清盛は明石入道に重なり、国母となった中宮徳子は、明石の君と明石の女御（中宮）の両者を兼ねた役割である。

さらに高橋氏は、清盛はむしろ自身を光源氏に擬していたという可能性を指摘し、白河院の落胤とされる清盛が大政大臣を経験した点など、共通点を挙げている。そこまで断定できるかどうかは検討の余地はあろうが、少なくとも平家一族が『源氏物語』を意識し、源氏文化に同化することで、武家でありながら摂関家や院をも凌ぐ文化的覇者を目指していたことは間違いない。⁸中宮徳子のサロンに二十巻の「源氏物語繪卷」があったことや、後白河法皇の五十賀で平維盛が青海波を舞い、光源氏の再来とされたことなど、その証左は枚挙にいとまもない。

しかし、ここで最も注目したいのは、清盛の官歴と交易の関係である。清盛が播磨守になったことじたい、明石入道の官歴と重なることはいうまでもない。そもそも明石入道は大臣の息子で近衛中将だったが、出世街道から外れたため、中央での官途に見切りをつけ、みずから志願して播磨守となった。そして財を成したが、退任後も都に戻ることはなく、愛娘の明石の君を光源氏と結婚させ、その財力で後援した。明石の君が東京錦の褥（初音巻）のような破格な唐物を所有しているのも、父入道の明石という地の利を活かして、最高級の唐物をも収集していた証であろう。明石入道の富の基盤に舶載品があったことは、清盛と共通する。

一方、清盛の参議から内大臣、そして太政大臣という官歴が、『源氏物語』の光源氏と重なることも、言わずもがなであろう。近衛中将のポストを捨てて播磨守になった明石入道が都に返り咲く夢をいだいたにせよ、実現することはなかったが、清盛はその見果てぬ夢を実現し、明石入道と光源氏の人生をみずからの官歴で架橋してみせたのである。

もともと、明石入道が財と地の利を活かして、舶載品を買い漁ったことを遙かに超えて、平清盛は日宋貿易の積極的に展開したのも事実である。以下、さらにその実態に迫っていくことにする。

四 福原での日宋貿易の実態

平清盛は、応保二年（一一六二）、福原のある摂津八部荘を手に入れ、五泊の一つである大輪田泊の改修にとりかかる。嘉応二年（一一七〇）九月には宋人が福原を訪れ、後白河法皇は清盛の勧めで宋人に謁見するため、福原に下向した。これは宇多天皇の寛平御遺戒で、異国人と直接対面することはタブーとした戒めを破る行為であり、九条兼実が『玉葉』で「我が朝、延喜以来未曾有の事なり。天魔の所為か」と仰天し非難している。

「延喜以来」とあるのは、醍醐朝の延喜年間から外国との正式な国交を断ってきた歴史をいうが、その背景には唐の滅亡による東アジア世界の混乱が及ぶことを避ける意味があった。また異国人に対して、穢れの対象として忌嫌する観念も生まれ、その根拠として寛平御遺戒が遵守されていたのであった。要す

るに、たとえ讓位したとはいえ後白河法皇が宋人と会うことは、まさに寛平御遺戒以来の国のスタンスに反する行為であったのである。

さらに承安二年（一一七二）九月には、宋の明州から後白河法皇と清盛宛に供物が送られた。ところが、後白河法皇への目録には「賜日本国王」と記されていたことから、公卿の間で論議がおこった。日本国王は後白河法皇に「賜ふ」というのは無礼であり、公卿の間では供物は返却し、返牒は不要との意見が大勢を占めた。しかし、清盛は翌年三月に、供物が美麗であることを称えた返牒を送り、後白河法皇からは砂金百両、清盛からは鎧と刀が返礼として送られたという。

ともあれ、これを機に日宋貿易も拡大し、ついに宋船が瀬戸内海にそのまま入って、大輪田泊で直接、交易するようになる。これは古代より大宰府の出先機関である博多の鴻臚館やその周辺で交易をおこない、瀬戸内海に外国船が入ることを禁じていた慣例からすれば前代未聞なことであった。それは大宰府の役人の利権を骨抜きにして、平家が日宋貿易を直接、管理する時代が到来したことを意味する。こうして拡大した日宋貿易の収益は、莊園・知行国からの収入と共に、平家の大きな財源となったことは、冒頭で触れた『平家物語』の一節の通りである。そして、それは治承四年（一一八〇）に福原遷都という流れを形づくるものであった。清盛はすでに「唐船」とよばれた宋の大船を数艘入手もして乗船していたが、福原遷都の直前には、これを使って、高倉上皇・安德天皇の嚴島行幸を実現している。

ところで、当時、日宋貿易で取引された品物は、輸入品は錦・綾などの織物、陶磁器、文房具、書籍、香料、染料、高麗人参、紅花などであった。日宋貿易で得た唐物は、安元三年（一一七七）三月の千僧供養の際のように、福原での法会に出た僧侶たちへの引き出物となったり、また珍品は法皇や天皇に献上されたのである。早くは仁安三年（一一六八）、高倉天皇が即位した折の大嘗会で唐錦が足りなくなった時、清盛とその娘の盛子（関白藤原基実の後妻）に助けを求めたエピソードもあった。⁹⁾ 日宋貿易の独占によって、貴族生活に不可欠な奢侈品である唐物は、平家一族に依存せざるをえなくなったのである。

また輸入品の中でも特筆するべきは宋銭で、当時、多量に輸入され、それが

貨幣として流通し、社会を支えていたことである。もともと清盛が推進した宋銭の流通は、都の旧貴族層の反発を招いてもいる。治承三年（一一七九）六月、流行病がはやった際には、物価高騰もあつてか、これが輸入された宋銭の流通によって引き起こされた「銭の病」として非難された（『百練抄』）。清盛は物価高騰に対して、物価統制法である沽価法（こかほう）を取り入れた新しい制度を採用し対応したが、九条兼実が宋銭は本朝で発行した貨幣ではなく、私鑄銭（贋金）と同じであるとして、宋銭流通を禁ずるよう主張し、批判している（『玉葉』治承三年七月二十七日条）。

五 『平家物語』と唐物

それでは、平清盛と宋が具体的にどのような関わっているのか、さらに『平家物語』から見ていきたい。巻一の「揚州の金、荊州の珠」の条については最初に述べたが、巻三には、重病の重盛を心配した清盛が、宋から来朝した名医の治療を受けるよう勧める場面がある。

境節入道相国、福原の別業におはしけるが、越中守盛俊を使者で、小松殿へ仰られるは、「所勞弥大事なる由其聞あり。兼ねては又、宋朝より勝たる名医わたれり。折節悦とす。是を召し請じて医療をくはへしめ給へ」と宣ひつかはされたりければ、小松殿たすけおこされ、盛俊を御前へ召して、「まづ医療の事、畏て承り候ぬと申すべし。但し汝も承れ。延喜御門は、さばかんの賢王にてましましけれども、異国の相人を、都のうちへ入れさせ給たりけるをば、末代までも、賢王の御誤、本朝の恥とこそみえけれ。況や重盛ほどの凡人が、異国の医師を王城へいれん事、国の辱にあらずや。…」

(①二二八—二二九)

しかし重盛は、醍醐天皇の先例を引きつつ、外国人を都に入れ、大臣として会うことは、まして国の恥だと拒否する。宋の先進的な医療技術に期待する開明的な清盛と、たとえ名医であろうと都で異人と接することに慎重な重盛との温度差を感じる場面である。重盛が没したのは、ちょうど「銭の病」が流行つ

た治承三年（一一七九）の八月のことであり、宋銭流入をはじめ日宋貿易を積極的に進める清盛に旧貴族層が反発していることを意識した発言とみられなくもない。

もともと重盛も、先進国である宋の存在を否定しているわけではなく、同じく巻三では、自身の後世の供養を宋の育王山に頼むために、妙典に三千五百両を預けるといふ場面がある。

又おとど、「我朝にはいかなる大善根ををいたりとも、子孫あひついでとぶらはむ事有がたし。他国にいかなる善根をもして、後世を訪はればや」とて、安元の比ほひ、鎮西より妙典といふ船頭を召しのほせ、人を遙かにのけて、御対面あり。金を三千五百両召し寄せて、「汝は大正直の者であんなれば、五百両をば汝にたぶ。三千両を宋朝へ渡し、育王山へ参らせ、千両を僧にひき、二千両をば御門へ参らせ、田代を育王山へ申し寄せて、我後世とぶらはせよ」とぞ宣ひける。

(①二二七)

これは事実であつたらしく、『宗像記』に拠れば、建久九年（一一九八）の秋、宋から重盛の追善供養のために藏経や経石碑を船に積んで来朝したものの、すでに平家が滅んだ後で、宗像氏国に託して帰国したという。

また清盛の死後の場面だが、巻十には、清盛が砂金を贈って、宋の皇帝から返礼に贈られた「松蔭」という硯が、捕らえられた息子の重衡にまつわる話として出てくる。

上人もよろづ物あはれに覚えて、かきくらす心地して、泣く泣く戒をぞ説かれける。御布施とおぼしくて、年ごろ常におはしてあそばれける侍のものに預けおかれたりける御硯を、知時して召し寄せて、上人に奉り、「是をば人にたび候はで、常に御目のかかり候はん所におかれ候ひて、某が物ぞかしく御覽せられ候はんたびごとに、おぼしめしなすらへて、御念仏候べし。御ひまには、経をも一卷御廻向候はば、しかるべう候べし」など、泣く泣く申されければ、上人とかうの返事にも及ばず、是をとって懐にいれ、墨染の袖をしぼりつつ、泣く泣く帰りたまひけり。此硯は、親父入道

相国、砂金をおほく宋朝の御門へ奉り給ひたりければ、返報とおぼしく
て、「日本和田の平大相国のもとへ」とてをくられたりけるとかや。名を
ば松蔭とぞ申しける。(2)二八二―二八三

重衡が法然上人に会うことを願って許され、法然に父の形見の「松蔭」を布
施として渡し、自身の回向を頼む場面である。「日本和田」とは大輪田のこと
を指すので、硯「松蔭」は清盛が福原に滞在していた頃、宋の皇帝から贈られ
た硯ということになり、宋と清盛の密なる関係がうかがわれる。

『平家物語』で、清盛と宋との関わりを示す場面は、この二つに尽きている。
また、清盛に限らず、平家一門に広げても、予想しているほど「唐物」は多く
見られない。他の例は、合戦の折、死を覚悟した武人が最後の装いとして、唐
綾おどしの鎧を着用する例などである。唐綾おどしの鎧とは、唐綾を細く裁つ
て豊んで鎧の組糸とした品で、『平家物語』巻九で源氏に追われ、落ちゆく平
通盛の出で立ち、また巻十一の屋島の合戦や壇ノ浦合戦での平教経の出で立ち
の例がある。とはいえ唐綾おどしの鎧は、日宋貿易に深く関わった平家一族ゆ
えということでもなく、木曾義仲や源兼綱の死装束となつていたので、合戦の
折、死を覚悟した武人の最後の装いの装いとして、パターン化されているとも
いえる。こうした唐物の語りなしは、やはり『平家物語』では平家の栄華より
も滅亡を語ることに重きが置かれていたという、物語の基調によるものかもし
れない。また唐綾おどしの唐綾が、舶載品と断定できるのかどうか。唐綾は『明
月記』の時代に都でも生産されていたことは確認できるので、時代を遡って国
産品である可能性も捨てきれない。

六 平家納経と『太平御覧』

平家一族と唐物の関係について、『平家物語』以外にも視野を広げてみよ
う。平氏の栄華を象徴する品といえ、誰しも思い浮かべるのは、厳島神社に
奉納された国宝『平家納経』の存在であろう。長寛二年(一一六四)の九月、
内大臣に就任する二年前に、清盛は一門の栄達を感謝し、来世の冥福を祈るた
め、厳島神社に裝飾経を奉納した。内容は『法華経』二十八卷、『無量義経』

『観普賢経』『般若心経』⁽¹²⁾『阿弥陀経』各一卷と、清盛の『願文』を加えた全
三十三卷であった。いずれも五彩の料紙に金銀の砂子や切箔が散りばめられ、
見返しには優美な大和絵や唐絵が描かれており、軸首には水晶・乾漆などが用
いられている。当時の工芸技術の粋を尽くした華麗な裝飾経だが、その表紙や
見返し絵に使われた顔料は、すべて舶載品であった。十一世紀後半に成った藤
原明衡の『新猿楽記』には、唐物として以下のように四十種以上の品物が列
記されている。

沈・麝香・衣比・丁子・甘松・薰陸・青木・竜腦・牛頭・雞舌・白
檀・赤木・紫檀・蘇芳・陶砂・紅雪・紫雪・金益丹・銀益丹・紫金膏・巴
豆・雄黄・可梨勒・檳榔子・銅黄・緑青・燕脂・空青・丹・朱砂・胡
粉・豹虎皮・藤茶碗・籠子・犀生角・水牛如意・瑪瑙帶・瑠璃壺・
綾・錦・羅・穀・緋の襟・象眼・縵綢・高麗軟錦・浮線綾・呉竹・甘
竹・吹玉等。

傍線で示したように「銅黄・緑青・燕脂・空青・丹・朱砂・胡粉」は、絵
画を描く顔料であり、これらはすべて貴重な舶載品だったのである。また『法
華経』の中の『提婆品』の題簽は舶載品の瑠璃で出来ていたという。⁽¹³⁾まさに
王朝文化の精華といわれる平家納経の華麗な美も唐物によって支えられていた
のである。

しかし、唐物にまつわる平清盛のより著名なエピソードといえ、舶載され
た『太平御覧』をめぐる話である。

『太平御覧』とは、宋の太宗が、李昉らに命じて編集させたもので、九八三
年に完成した中国の一大類書、いわば大百科事典である。千巻に及び、天、地、
帝王、州郡、封建、職官、礼、楽、道、積から四夷、疾病、妖異、動植物に及
ぶまで、五五部門、五千項目を列挙するという。宋朝では長らく禁書となつ
て、国外に持ち出されていなかった。ところが、治承三年(一一七九)、来航
した宋船が『太平御覧』の摺本(印刷した本)三百冊をもたらしたので、清盛
は早速、購入したのである。そして副本の写本を作った上で、元本を内裏に献
上しようとした。おりしも同年暮の十二月十六日、二歳の東宮(翌年即位して

安徳天皇)が清盛の西八条第に行啓したので、その内の三帖を美麗に包んで献上した。包んだ布は浮線綾で、裏が蘇芳をほかし染めにした品で、唐物であった可能性も高い。それに玉をつけ、銀の枝につけるといふ尽善尽美のものであった。

そもそも、この治承三年(一一七九)という年は、清盛にとって激動の一年であった。六月の宋銭の「銭の病」騒動に加えて、八月には後白河院とのパイプ役であった長男の重盛が死去している。その直前には関白基実の後妻であった娘の盛子が死去し、平家が預かっていた摂関家領を後白河院が没収することになった。後白河院と何かと衝突を重ねた清盛は、ついに十一月に蜂起し、後白河院を鳥羽離宮に幽閉し、院政を停止させたのであった。まさに平氏政権が成立した直後に、この『太平御覧』が献本されたのであった。

しかも、それは寛弘七年、一条天皇が枇杷第に行幸した折、藤原道長が摺本の『文選』や『白氏文集』を献上した先例を、清盛が意識した上でのことであった。清盛が自身の権威の先例を絶頂期の道長に見ていたことをうかがわせる興味ぶかいエピソードである。

道長自身、家司クラスを大宰大式に送りこみ、摺本の『文選』や『白氏文集』など書籍のみならず香料・瑠璃壺・唐綾錦など、最高級の唐物を献上させていた。道長の為政者としての権力も文化的権威も、朝廷を凌駕する質量ともに充実した舶載品によって支えられていたのである。¹⁵⁾

先に『源氏物語』の符合にふれ、清盛が自身を光源氏に擬していたという可能性を示唆した高橋昌明氏の説を紹介したが、いづれにしても清盛が先例や規範と仰いだのが、摂関時代の最盛期の権力者であったことは興味ぶかい。貴族文化の象徴である装飾経を平家納経のような形で残し、舶載品の書籍を道長のように献じた清盛。道長も虚構の光源氏も、権力保持のためには文化的な権威づけが必要であり、そのために唐物を有効活用したといえるが、清盛が武家の棟梁から文化的覇者になるためには、さらに大きなハードル越えが課せられていた。平家一族にとって、日宋貿易で得た唐物の富は、経済的な基盤であったばかりか、旧貴族層や上皇を抑えて平氏政権を樹立し、文化的覇者となるための必須の糧だったのである。

もともと平氏政権の樹立は、そのまま平家滅亡のストーリーの幕開けであっ

た。翌治承四年(一一八〇)は、二月の安徳天皇の即位、三月の高倉上皇・安徳天皇の唐船による厳島行幸と慶事が続くが、五月には以仁王の乱が起こり、さらに反平氏勢力の蜂起が全国規模で起こっていく。思えば舶載品の『太平御覧』の献進は、平家の栄華にとって最後の光芒の一齣であったともいえよう。しかし、その約八十年後、文応元年(一二六〇)に『太平御覧』を購入した内大臣の藤原師継の日記である『妙槐記』には、『太平御覧』について清盛が初めて購入した後、次々と宋人が将来し、当時多くの知識人が愛読している旨が記されている。知のエンサイクロペディア、世界を書物に凝縮した『太平御覧』を買い上げた平清盛の開明性は、後の時代にも貢献したのである。

注

(1) 引用は小学館の『新編日本古典文学全集』により、頁数を示す。ただし私に表記を改めた箇所もある。

(2) 『書経』は儒教の五経の一つで、もともとは単に『書』といい、漢代以後に『尚書』とよばれ、『書経』と称するのは宋代に始まる。『詩経』と並び称せられる古典のなかの古典である。編者は孔子と伝えられ、上古歴代史官の文書をもとに、堯・舜・夏・商・周三代の帝王の事蹟を一〇〇篇にまとめたもの。古代の政治における君臣の言行の模範とすべきものを集めたもので、史実のほか神話的伝承を含んでいるが、儒家はこれを尊重した。

(3) 『書経』の一編名。禹が天下を巡視し、境界を定め、交通、物産を調べ、貢賦(こ)うふ)の制を定めた事蹟を記す地理書の一種である。

(4) 『唐書』は唐代に関する正史で、『旧唐書』『新唐書』の二種があり、一般的には『新唐書』をさす。『旧唐書』二〇〇巻は五代後晋の劉らの撰で、九四五年成立。『新唐書』二二五巻は北宋の歐陽修らの撰で、一〇六〇年成立。宋代になって入手可能となった史料を多く用い、『旧唐書』の欠を補うところも多い。

(5) なお『太平記』にみえる「蜀江の錦」は、明代に織り出された華やかな大文様の緯錦の可能性があり、今日、名物裂として珍重されるものである。

(6) 清盛は厳島神社を平家の守護社として信仰し、長寛二年(一一六四)、装飾経三三巻(平家納経)を奉納した。清盛はやがて神主の佐伯景弘の願いを聞き入れ、

厳島神社が今日のような姿となる大造営に乗り出した。(五味文彦『中世を歩く』岩波新書、二〇〇九)

(7) 高橋昌明『平清盛、福原の夢』(講談社選書メチエ、二〇〇七)

(8) 三田村雅子『安元御賀の「花の姿」』(『記憶の中の源氏物語』新潮社、二〇〇八)

(9) 森克己『統日宋貿易の研究』(勉誠出版、二〇〇九)

(10) 『百練抄』治承三年六月の条に「近日。天下上下病悩。號之錢病」と記された病の事で、当時の人々が流行した病を海外から流入する錢貨によるものと考えている事がわかる。なお錢病を物価高騰と限定する説もある。

(11) 網野善彦『日本社会の歴史 中』(岩波新書、一九九七)

(12) ただし現存する『般若心経』は仁安二年(一一六七)の書写である。

(13) 小松茂美『平家納経の研究』(『小松茂美著作集』第十一卷、旺文社、一九九五)

(14) この辺の歴史的経緯については、下向井龍彦『日本の歴史七 武士の成長と院政』(講談社、二〇〇一)や、本郷恵子『全集日本の歴史6 ふたつの王権』(小学館、二〇〇八)などを参照。

(15) 河添房江『源氏物語と東アジア世界』(NHKブックス、二〇〇七)

The Heike clan and the Chinese fabrics

Fusae KAWAZOE

Japanese Literature Department

Abstract

The Heike clan was concerned with trade with Chinese Soong deeply from the times of father of Kiyomori Taira and built millions wealth. By this report, I clarified the Heike clan and the relation of foreign-made articles from position of Kiyomori and the actual situation of the trade, “The Heike Monogatari” and “the Heike copied sutra” of the national treasure. Furthermore, I mentioned that the prosperity reminded of Akashi clan with Hikaru Genji of “The Tale of Genji”. In addition, I clarified that promotion of the trade such as a meeting with the person of Soong or import of the money of Soong invited the repulsion of the class of nobles of the capital. However, Kiyomori purchased “Taiheigyoran” of Soong, and it showed the Kaimei nature of Kiyomori to have given to the Emperor and contributed in the Coming ages. The wealth of the Chinese fabrics for the Heike clan was an economical base, and an cultural base to control the class of nobles and an ex-emperor and establish the government of Heike clan, and to be a conqueror of the culture.

Key words : kiyomori Taira, foreign-made articles, The Heike Monogatari, The Tale of Genji